説教要旨「教えて！愛し合う方法」

ヨハネによる福音書 １３章 ３１～３５節

「互いに愛し合いなさい」。素晴らしい教えです。けれどもその愛し合いなさいと言われている対象が、露骨に敵意を向けてくる相手であっても、わたしたちはその相手に愛し合える様に働きかけることができるでしょうか。

イエス様は、最後の晩餐の席で、弟子たちの足を洗われました。足を洗うと言うのは下僕の仕事です。「わたしがあなたがたを愛したように」と言われるイエス様は、まさにご自分を裏切ろうとしているユダや、イエス様を見捨てて逃げ去る他の弟子たちの足をも自ら洗われて、その愛を具体的に示されたのです。自分に敵意を抱いている相手を、あるいは自分を見捨てて離れて言ってしまう相手を、それでも愛する。そんなことがわたしたちにできるのでしょうか…。

この直後、一番弟子を自負していたペトロはイエス様に、「あなたのためなら命を捨てます」と豪語します。しかし彼は、イエス様が捕らえられて連れて行かれる中、イエス様との関わりを三度も否定することになります。けれどもこのときのペトロは、イエス様のために命を捨てることが出来ると本気で思っていたはずです。それでもペトロは、イエス様を見捨ててしまうのです。イエス様の最初の弟子であり、誰よりもイエス様と同じ時を過ごし、誰よりもイエス様を愛していると自負していたペトロでさえ、この有様です。わたしたちの抱く愛は、逆立ちしても神の愛=アガペーには届きません。イエス様から受けた愛を、イエス様に対してお返ししようとしても、決して釣り合いなどとれないのです。

イエス様の弟子として歩むことは、茨の道です。イエス様の愛の大きさと、自らの愛の無さをかみしめつつ、互いに仕え合い、互いに愛し合うものであろうとして歩むことだからです。どれだ愛そうとも、イエス様の愛には遠く及びません。しかし、互いに愛し合えない葛藤を抱えながら、それでもイエス様の言葉に従おうとして歩むことで、イエス様の愛が、そんな私たちを通してこの地上に示されていくのではないでしょうか。

（２０２２・５・８　説教者：稲垣真実）